「クリスマス、おめでとう」

2025 年 12 月 25 日

クリスマス、おめでとうございます。今年も、御子イエスのご降誕に思いを向ける喜びの時を迎えることができました。御子イエスのご降誕については、マタイ福音書とルカ福音書が記している。その記述は、もちろん歴史的事実を書いたものではなく、著者たちが主イエスの降誕を物語として創作したものである。創作であるから、どうでもよいのではなく、救い主であるイエス・キリストの生涯を紹介する福音書のプロローグとして、イエスがキリストであることを壮大に、また、豊かな深い意味づけを持って、見事に描いているのである。

ガリラヤの町ナザレで、ダビデの家系を受け継ぐヨセフとマリアは婚約していた。マリアは結婚前に、身ごもっていることが分かった。命の誕生は、男女の性交によって可能となる。マタイ福音書は、男性ヨセフ側から書いている。ヨセフは、マリアが他の男との間で懐妊したと思った。婚約は結婚と同じように理解されていたので、マリアが姦淫の罪に問われて、辱めを受けることを避けようと、心優しいヨセフは密かに離縁しようと決意をする。すると、天使がヨセフの夢に現れ、マリアに宿った子は聖霊の働きによるのであり、この子は民を救うからであると告げた。ヨセフは、天使の御告げを信じ、マリアを妻とし、イエスの誕生までは彼女を知ること（性交）はなかった。マタイ福音書は、マリアの懐妊は人間の業ではなく、聖霊、神が関与した出来事であったと告げる。

ルカ福音書は、女性マリア側から書いている。マリアは天使ガブリエルから、「おめでとう、恵まれた方、主があなたと共におられる」と声をかけられる。マリアが戸惑っていると、天使は、あなたは男の子を産む、イエスと名付けなさい。偉大な人となり、いと高き方の子と呼ばれ、神がダビデの王座をくださると言う。マリアは、「どうして、そんなことがありえましょうか。私は男の人を知りませんのに」と答えると、天使は「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを覆う。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる、…　神にはできないことは何一つない」と語る。マリアは、「私は主の仕え女です。お言葉どおり、この身になりますように」と答え、全てを受け入れる。ルカ福音書も、マリアの懐妊は「聖霊があなたに降り」と、神の直接的な関与であると告げている。

両福音書とも、人間の思惑を超え、御子イエスは処女マリアが聖霊によって懐妊したというクリスマスメッセージを初めに記している。理性的には処女降誕は受け入れることができない。しかし、世の偉人の誕生には特別な物語を作ることは常のことで、イエスもキリストと崇めるために作り上げた物語と言う人は多い。ナザレのイエスは歴史的に実在した人であるから、当然、精子と卵子の結合によって生まれた。ヨセフとマリアは婚前交渉によって懐妊したと言う人もいる。また、ナザレにはローマの駐屯兵がいて、彼らは強姦を日常的にしていた。マリアは、ローマ兵に強姦されて懐妊した。そう受け止めると、主イエスの差別への視点と怒りを理解することができると言う人もいる。人間的に色々な想像を膨らまし、色々な考えを主張することは自由であろう。

しかし聖書は、人間の一切の思惑を超えて、処女マリアから「聖霊によって」「聖霊が降り」と神が関わって、御子イエスは懐妊したと告げている。私は、このクリスマスメッセージを信じる。人の世は因果応報で、不可逆的な時が続く世界であるが、その世界に永遠の神が御子イエスにおいて、結び合う接点を開いてくださった。永遠が時間と接し、御子イエスの降誕において、神は、人が永遠と、究極と関わる道を切り拓いてくださった。私たちは究極の神と結び合う神の奇跡をクリスマスに体験できるのである。これを信じて、クリスマス、キリスト礼拝を捧げる。クリスマスの喜びは、これに尽きる。